

アイノミドリシジミはゼフィルスという存在を高嶺の花と位置付けて図鑑のみを眺めていた昆虫少年時代に最も出会いたいチョウであった。1970年に郵便によるチョウ標本の交換相手となってくれていた宮古市の宝茂男氏が尾又峠産の蛹を送ってくれて、やがて羽化兆候を示した際に翅部分に見える金緑色から美しいオス個体の羽化を期待しのだが、まるでキツネに化かされたように羽化した個体は全体が褐色のメス個体だったという経験をしている。その実態は、左後翅にほんのわずかだけ金緑色の鱗粉が出たモザイクタイプだったという次第で、それはそれで極めて珍しいのだが、金緑色に輝くオス個体の羽化を期待していただけにがっかりしたものだ。その標本を図示したら以下の通りで角度を変えるとか、拡大することでかろうじてオスのモザイク金緑鱗粉を確認できる。



July 17, 1970 宮古市雄又峠産羽化



July 17, 1970



野外で本種に出会えた最初は、1978年7月29日、家族旅行で訪れた日光戦場ヶ原に向かう遊歩道沿いで目の前の灌木地帯に飛来した個体をネットインしているが標本は残っていない。さらには、砂礫岩が積み重なった高さ50mほどの急斜面を、いつ崩れ落ちるか分からない緊張感のなか一步步上って行って、その瓦礫頂上部の枝葉上に舞うゼフィルスを捕まえたらアイノミドリシジミのオスだったという危ない行動は思い出しても冷や汗が出る。

標本として残っているのは、2004年7月11日、北海道富良野市の布礼別川林道で、メスアカミドリシジミやジョウザンミドリシジミを採集した際に本種もネットインしているが、何かの樹の葉上にいた個体ではなく、飛翔中の個体を空中でネットインしていて、同じような状況で捕獲したはずのジョウザンミドリシジミと同様にそのときのリアルな記憶が全くないのが情けない。



July 11, 2004
布礼別川林道



July 11, 2004 布礼別川林道 アイノミドリ